

高根地域

野麦峠

Nomugitouge

語り手 堀野 徹

聞き手 山本真紀

企画:高山市

取材日:令和3年2月8日

野麦峠の歴史 ～奈良時代から明治時代～

野麦峠は、岐阜県と長野県の県境、乗鞍岳と鎌ヶ峰の間の標高1672メートルのところにあります。野麦峠が拓かれたのは、奈良時代に信州と飛騨を結ぶ官道として、杣道を改良したのが始まりだと言われています。その後、「鎌倉街道」「江戸街道」と呼び方が変わり、明治時代に入ってから「野麦街道」になり、今に至っています。江戸時代に高山が天領になってからは、代官が江戸からの行き来に利用していたそうです。

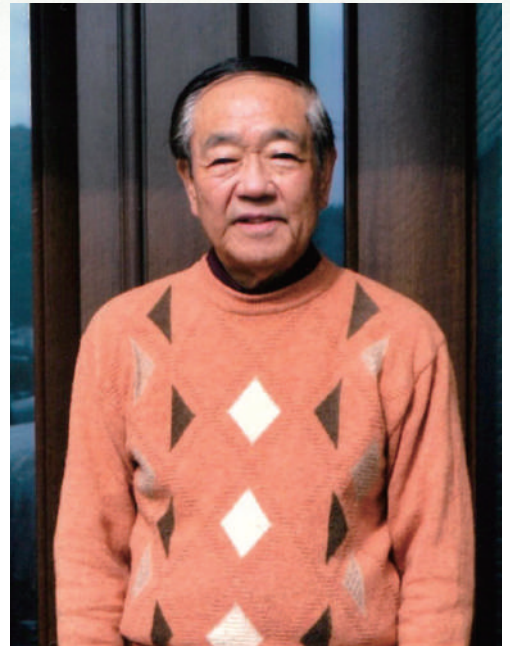
富山湾で水揚げされた鰯を塩漬けにして、旧正月に信州まで運んだのも江戸時代です。当時、信州では鰯が飛騨から入って来る事から「飛騨鰯」と呼んでいました。富山の売薬さんが、一反風呂敷に薬を詰めた行李を包み、背負い野麦峠を越えて各地に出向いたのも江戸時代からだったんですね。しかし、厳しい峠越えにより命を落とす人もいました。そこで、峠に小屋を建て、番人を置き、峠越えする人達を救いたいという願いを幕府が聞き入れ、天保12年に野麦峠の頂上に「お助け小屋」が建てられました。

明治時代、政府の外貨獲得の切り札が生糸の輸出だったことから、製糸工場は、飛躍的に増えました。特に岡谷に製糸工場が多かったのは、諏訪湖と言う水瓶があったからです。諏訪湖へ流れ込む十数本の川の水を使った水車の動力、また繭を煮たり、繰糸用水に必要なたくさんの水を諏訪湖が担っていました。それらの理由で、必然的に岡谷に工場が増えたんですね。

明治中期になると、岡谷を中心とした信州へ糸引き稼ぎに行く為、多くの娘さん達が雪の野麦峠を越えるようになりました。諏訪湖が全面凍結する冬は、操業ができなくなるので、工場は3月1日に始まり、12月20～25日に終わりました。このような工場の都合で、娘さん達が信州に向かう時は2月下旬、家へ帰る時は12月下旬といずれも寒さ厳しい雪の深い中を歩かざるを得なかったんです。

「あゝ野麦峠」出版による影響

明治44年になると鉄道の中央線が全面開通し、野麦峠を越える人は少なくなりました。昭和9年には、高山線が全線開通しました。野麦峠を越えるのは地元の人達だけになり、野麦集落はずいぶん静かになってしまいました。そんな状況で時が流れ、昭和43年に、朝日新聞社から出版された山本茂実氏の「あゝ野麦峠」が、ベストセラーになったんですね。それで野麦峠の名は全国に知られることになり、野麦集落は再び活気を取り戻しました。また、昭和43年は明治百年の記念の年でもあり、高根村と河合村及び長野県奈川村の三者で峠の頂上に本の出版記念と併せた



堀野 徹

昭和19年9月10日生

プロフィール

<学歴>

昭和39年3月 高等学校卒業

<職歴>

昭和39年4月 民間企業に勤務

昭和46年4月 高根村役場に就職

企画開発課、総務課、農林課及び

住民福祉課に所属

平成17年1月 高根村役場を定年退職

平成17年～令和元年

峠の資料館「野麦峠の館」の管理人を務める

(毎年4月下旬～11月)

<役職>

平成17年2月～平成22年3月

高山市社会教育委員

平成17年4月～平成27年3月

行政相談員(総務大臣委嘱)

平成21年4月～平成25年3月

高山市社会福祉協議会理事

記念碑を建てて祝いました。記念碑には「あゝ野麦峠」と書いてあります。揮毫は神岡町の出身で、当時朝日新聞の論説委員をされていた荒垣秀雄氏にお願いしました。

「あゝ野麦峠」には、製糸工場の最も過酷な明治40年前後の状況が描かれていました。内容は、当時、女工さんだった数百名人にも及ぶ方からの聞き取りをもとに書かれたルポタージュ(記録文学)でした。義務教育を終えたばかりの12歳の幼い娘さん達が、冬の寒さ厳しい峠を越えた事、工場では、食事の時間を除き、朝5時から夜の7~8時まで働き詰めだった事、繭を煮る湯が熱く湿度も極めて高い状態で働いていた事、肺病等で体を壊して働けなくなる人もいた事等が書かれていました。

出版された翌年より、全国各地の方が野麦峠を訪れるようになりました。当時の娘さん達の思いを偲び、野麦峠を訪れる若い女性のグループを中心とした観光客が増えました。そんな状況に対応しようと、高根村は保健所の指導を受けながら7軒の民宿の整備をはじめ観光客の受け入れ体制を整えました。観光客は、定期バスで終点の上ヶ洞までやって来た後、野麦集落まで歩き、野麦の民宿で宿泊しました。翌日は、工女の思いを辿りながら旧街道を歩いて峠を越え、信州へと向かいました。一日に歩く距離は12キロメートルにも及びます。きっと、当時の娘さん達に思いを寄せたから歩けたんでしょうね。

一方、江戸時代に建てられた「お助け小屋」は長年放置され、終戦の直後に雪の重みで倒壊して無くなっていました。野麦集落に、かつて宿屋をやっていた家屋がありました。ちょうど空き家になっていたその家屋を移築し、休憩、宿泊施設としての「お助け小屋」を再現することになりました。昭和45年3月に高根村は、当時の運輸省所轄の財団法人高根村観光開発公社を設立し、「お助け小屋」の再現と完成後の運営体制を整えました。資金は岐阜県土地開発公社の支援を受けました。しかし、その頃は、まだ道路は工事の途中で、野麦峠の自動車道路は長野県と結ばれていなかったんです。幸い、長野県側は営林署の林道として峠の頂上まで繋がっていました。大変ではありますが、家屋等の輸送にその道を利用する事にしました。野麦、日和田、木曾福島、藪原、境峠、寄合渡、野麦峠のルートで運搬しました。完成式は昭和45年10月2日に決まりました。道路の開通も同じ日を目指して着々と進められ、予定通りに「お助け小屋」も道路も完成し、昭和45年10月2日、当時の岐阜県知事の平野三郎氏も参列し、盛大に完成式が執り行われました。

道路の開通で車が行き来出来るようになり、全国から大勢の観光客が訪れ、賑わいが生まれました。「あゝ野麦峠」が出版された後は、高校の国語の教科書(角川書店)への掲載や彫刻家の佐藤忠良氏が絵を描いた絵本(ポプラ社)が出版される等の新しい動きも生まれたんです。また、「劇団民芸」が日色ともえさん、樫山ふみさんや高山出身の水梨民子さん等の出演で全国公演され、好評を博しました。



お助け小屋

映画「あゝ野麦峠」の影響

昭和53年には、映画化の話が具体化しました。実は、昭和44年にも吉永小百合さん主演による映画化が検討されていたんです。監督も内田監督に決まり、具体化していたようですが、どういうわけか実現しなかったんですね。吉永さんは昭和43年に付き人の女性とふたりで、密かに野麦峠を訪れていたそうです。長野側から峠を越え、野麦集落で宿泊されましたが、泊めた家の人にも全く気づかず、後でわかってびっくり仰天だったそうです。翌年の春、吉永さんは正式に高根村を訪問されました。

吉永さんが演じる予定だったのは、河合村角川出身の政井みねさんでした。当時、模範となり、年収が百円を超える工女は、「百円工女」と呼ばれていました。賃金は、輸出用の上等の生糸を紡ぐ量により決まったそうです。その頃の米俵一俵(60キログラム)が4円ほどでしたから、いかに大きな金額がよくわかりますね。みねさんは、「百円工女」としてもはやされていました。明治42年11月、体を壊して働けなくなった為働いていた山一林組製糸から、政井家に「ミネビヨウキスグヒキトレ」の電報が届きました。電報を受け取った兄の辰次郎さんは、身支度をして家を出発し、角川から岡谷まで夜通し歩き2日間で工場に着いたそうです。その後、妹のみねさんを背負って角川に向かいましたが、飛騨の玄関口である野麦峠に辿り着いたのは5日目の事でした。極めて残念な事に、飛騨へ一歩足を踏み入れた安堵感からか、みねさんは、「ああ、飛騨が見える」と一言呟き、息を引き取りました。明治42年11月20日の午後2時頃の出来事です。辰次郎さんは、妹の遺体を背負い、さらに4日かけて故郷の角川へ辿り着きました。地域の人たちは、手を合わせて出迎えてくれたそうです。極めて切なく悲しい出来事です。

みねさんは、現在、角川にある専勝寺の墓地で眠られております。今でも各地から多くの人達がお参りにみえるそうです。吉永さんは映画化の中止に本当にショックを受けられました。それでも、吉永さんのみねさんに対する思いは強く、「政井みね之碑」を寄贈してくださいました。この碑は、現在も野麦峠の展望台に設置されています。

当初から、「あゝ野麦峠」の映画化には、莫大な資金が必要だと言われていて、興業的に成り立つかどうか懸念されていたんです。そんな折、宮城県の仙台市で電子関係の事業で成功を取っていた会社の社長が、野麦峠に対する思いを強くされ、当時のお金で4億円を出資し、映画化が実現することになりました。まず、「新日本映画社」を設立し映画制作に着手しましたが、配給等の関係で「東宝」とタイアップすることになりました。「東宝」からは、大道具小道具や衣装のスタッフの協力等も得ることが出来ました。映画監督は、巨匠と言われていた山本薩夫氏です。主演の大竹しのぶさんをはじめ著名な俳優さん達が出演されました。クランクインは昭和53年11月でした。11月と翌年の2月の厳寒の中をそれぞれ1週間ずつ野麦峠で撮影しました。その間、俳優さんや関係者は野麦の民宿に分泊されました。集落にはファンや報道関係者がたく



政井みねの碑



あゝ野麦峠の像

さん押し寄せて来て、お祭り騒ぎでした。撮影を進めるにあたり、多くのエキストラが必要であることから、高根の小中学生は総動員。若い女性達も駆り出されました。冬の撮影はとても大変でした。工女たちが隊列を組んで雪の中を歩く遠景の場面では足元が映らないので長靴を履きます。しかし、足元も映る場面では足袋に草鞋なんです。太陽が雲に隠れると、太陽が出るまでその場で待ちました。女優さん達は唇を紫にして耐えていましたが、小言を言う人は誰ひとりいませんでした。当時の娘さん達も辛い思いをしていたのだから…と思われたのではないのでしょうかね。厳寒の山の中の撮影でしたから、周りに水もありません。そこで、災害時に使用する炊き出し用の釜に雪を入れ、プロパンガスで温めて湯にし、豚汁を作って体を温めました。今思い出しても、その光景は壮絶でしたね。

昭和54年6月、映画「あゝ野麦峠」が完成し、全国一斉に公開されました。映画館は切符を買うための行列ができるほど大ヒットしました。関係者から、糸引きに行った経験を持つお婆さんの中には、映画館の前で手を合わせる人もいたという話も聞きました。映画の影響は極めて大きく、公開されてから野麦峠を訪れる観光客は大きく増加しました。ゴールデンウィークやお盆、秋の紅葉シーズンともなれば道幅の狭い野麦峠に大渋滞が発生してしまい、受け入れる側も訪れる人達も大変でした。

峠の資料館「野麦峠の館」を通して

高根村では、国の補助事業を利用し、かねてより思いがあった野麦峠に関する資料館の建設を始めました。平成元年の事です。それと同時に、展示内容の検討も進めました。展示物は、野麦峠の歴史を15分程度の映像で紹介できるシアター、工女の姿を描いた沖野清氏の絵画や工女姿のマネキン、映画「あゝ野麦峠」の脚本や撮影中の記録写真等、野麦峠関連の展示と当時の高根村の産業だった養蚕や杣に関する用具等です。その他、全国各地の峠の紹介パネルも展示することにしました。日本には多くの峠があり、それぞれ大きな役割を果たしてきました。しかし、トンネルやバイパスの建設により多くの峠は失われ、果たしてきた役割も忘れ去られつつありました。そこで、47都道府県から紹介いただいた代表的な峠を写真と共に、峠の所在地、名前の謂れ、歴史的背景を紹介することになりました。峠の資料館「野麦峠の館」は、平成3年6月にオープンしました。開館しているのは、4月下旬～11月初旬の野麦峠が冬季閉鎖されるまでの7ヶ月ほどですが、峠に関心を持っておられる方が、結構たくさん入館されましたね。

平成17年より、私が資料館の管理人を務める縁をいただき、入館者の対応をする事になりました。映画の影響が極めて大きいのか、工女達は家が貧しい為に製糸工場に身を売られ、奴隷のごとく酷使され、成れの果ては「みねさん」のような最期を辿っている入館者がほとんどである事に驚きました。娘さん達の名誉の為に、その誤解を解かなく



表彰状

てはいけないと強く思うようになりました。そこで、12歳から10年間、同じ工場で勤務して長野県生糸同業組合連合会より表彰された方の表彰状や当時、岡谷の写真館で撮られた娘さん達の写真、青年からの恋文等の資料を集めました。来館者にこれらの資料を紹介にする事で、娘さん達にも青春があり、親の為に一生懸命に働いた逞しさを伝えていきたいと思いました。

紹介している恋文は、平成17年に開催されたシンポジウムで高山女性史学会の神出加代子さんから資料としていただいたものです。了解を得て、入館者の皆さんに紹介していました。この恋文は飛騨の青年が岡谷へ糸引きに行っている娘さんに宛てたものです。娘さんの実家の仏壇の引き出しから出て、その後、神出さんの手に渡ったそうです。書き出しは、「御手紙下され誠に有り難く深く御礼申上候」から始まり、中段には青年の近況が描かれ、終盤に「誠に申し兼ね候へ共貴女様の御写真一枚御送り下され度此段御依頼申上候」「写真御送下さるか一日千秋の思いにて待居り候」と書かれています。ものすごく胸が熱くなりました。娘さん達は年数を重ねていくと稼ぎも良くなり、心のゆとりも出てくる。だから恋愛もあり、写真も撮れたのだと思いますね。この恋文を紹介すると、入館された方は感動されます。目から鱗だと。神出さんは「残念ながらふたりは結ばれなかったみたいですね」と言われていました。ある日、50代後半のご夫婦が入館され、いつものように各種資料の紹介と共にこの恋文も紹介しました。突然、ご主人が「これは私のおじいさんとおばあさんです」と言われ、お互いにびっくりしました。ふたりは結婚されていたんです。後日、そのご夫婦から、恋文をやりとりした頃のおふたりのそれぞれの写真とふたりで仲良く写った晩年の写真を送っていただきました。そこには、「あの世でもふたりで仲良く過ごしていることでしょう」と言葉が添えてありました。入館者に恋文と一緒に写真も紹介すると、しばらくの沈黙がありますが、皆さん感動されますね。

資料館には、北は北海道、南は沖縄までいろいろな地域の方が入館されます。年輩の方が多くですね。でも、中学生の夏休みの自由研究で来館する女子学生や小中学校の教員の方もみえます。ある時、東京より男性ばかりの7人のグループが入館されました。いつものように説明をしました。帰られる時に、その中のひとりが私の方へ近づいてきて、

「今日は本当に話が聞けて良かった。実は、僕のおじいさんは製糸工場をやっていたんです。映画を観ると岡谷が飛騨の娘をいじめたというイメージで伝わってしまって非常に悔しい。うちの工場にも飛騨の娘さんはいたけど、自分なりに精一杯大事にした。けっしてうまいものを食べさせたとは言わないけれども、大事にしていた。だけど世間からは悪者扱い。おじいさんから、非常に悔しい思いをしたと聞いていた。だから、本当のことを言うと、野麦峠には来たくなかった。だけど、グループの行動だったから、しぶしぶ着いて来て、しぶしぶここに入りました。だけど、今日は資料館に入って良かった。飛騨の人から本当のこと



峠の資料館「野麦峠の館」

を語っていただいて本当に嬉しかった。これから東京に帰りますが、途中、岡谷によって仏壇にお参りして、おじいさんに今日のことを報告してから帰ります。」

と涙を流しておっしゃいました。この時、野麦峠を語ってきて本当に良かったなと思いました。

明治41年頃、岡谷には片倉製糸のような大きい工場から家内工業的な工場まで数えると247もの工場がありました。したがって工場も千差万別で、明治という激動の時代ですから、いろんな事があったと思います。そんな中、娘さん達は家の稼ぎ頭として、健気に逞しく頑張っていたと思います。当時は、日用品やいろいろな物を「ツケ」で買い、彼女たちが稼いだお金でまとめて払う「盆暮れ勘定」でした。「猪が飛び交う」って逸話が残っているんです。女工の娘さん達が稼いだお金で支払いをする。支払いを受けた人は、またそのお金で違う支払いをします。当時の紙幣には猪がデザインされていたので、猪があっちへ行ったりこっちへ行ったり飛び交っているということですね。本当に彼女達の稼いでくるお金っていうのはすごいお金だったんです。



現在の野麦集落の様子

野麦峠・野麦集落への思い

「あゝ野麦峠」が出版されてから53年。自動車道路が開通してから51年。映画化されてから43年が経ちました。野麦は、限界集落なんですよ。元々は、31戸あったのが、だんだん減って行って現在は17戸です。実際にずっと野麦で生活しているのは8世帯かな。80代、90代の独居世帯をはじめ60代以上の夫婦や独居世帯ばかりなんです。まさに崩壊寸前と言う状態ですね。これまでに、高根村もいろんな努力をしてきました。まずは、農業で生計を立てていけるようにホウレンソウの栽培の推進をしました。野麦は、標高1300メートル以上あって、非常に肉厚の品質のいいホウレンソウが採れます。今の80代90代の人達が働き盛りだった頃は結構、それで頑張っていたんです。やっぱりそういう基盤を整えることが大事ってことで、高根村が全面的に助成して基盤整備を進めていきました。また、ホウレンソウの栽培の他に夏は山で放牧、冬は家で飼育する「夏山冬里方式」という和牛の繁殖方法を採用して頑張ってきましたが、このようにだんだんと高齢化していきました。いろんな試みはやってきましたが、民宿については素通りのお客がほとんどになってしまいました。

歴史は繰り返すんです。野麦峠もそうなんですよね。一時期はぐーって栄えたのが、だんだんしぼんで行って、そしてまた「あゝ野麦峠」が出版され、それが映画化されてぐっと上って、またしぼんで。高根村観光開発公社が出来たのも、自動車道路の完成が早まったのも本の出版がきっかけでしたからね。実際、人々の記憶から、野麦峠の存在がだんだん薄れてきていることも事実です。やはり、野麦集落は野麦峠の歴史とともに続いてきました。今回は、野麦峠の歴史を後世に伝え残したい思いで話しました。そして、これからも新たな希望が持てる歴史が生まれることを願っています。